

情報エコロジーとしての家庭空間

土橋 臣吾

近年のデジタル情報化の流れは、生産の場、仕事の場だけにとどまらず、日常生活領域の情報化をさらに加速しつつある。本稿では、こうした動向を念頭に置きながら、家庭空間の情報化がいかなる社会的プロセスとして進展しつつあるのかを捉えていくための枠組みを模索していく。そのために、まず、これまでのメディア史やカルチュラル・スタディーズのメディア受容研究の中で家庭空間を主題化してきた幾つかの論考の知見を概観し、その上で、Nardiらが提唱した「情報エコロジー」の概念を家庭空間に適用していくことの可能性を探っていく。結論として、情報エコロジーの概念を導入することによって、情報化による家庭空間の変容をより積極的に捉えることができるようになるが、そのためには、情報エコロジー概念自体の再構成が求められることを示していく。

キーワード：情報エコロジー，家庭空間，家庭の情報化

1 はじめに

情報化住宅あるいはスマートホームといったコンセプトが示しているように、「家庭」という空間は近年の情報化政策の主要な宛て先として想定されている。ごく最近も、経済産業省の国家プロジェクトである「住宅分野の情報システム共通基盤整備推進事業」の一部として「情報家電モデルハウス」の展示会が多摩ニュータウンで開催された(注1)。実際の住宅に最新の情報家電を組み込んだこの展示では、たとえばインターネットと接続された調理器具や洗濯機、あるいは携帯電話によって外出中に宅配物の受け取りを行うシステムなど、情報テクノロジーを家庭生活に応用する色々なアイデアが提案されている。それらの多くは技術的には既に可能なものであり、それゆえこのイベントは「今すぐ手に入る未来」というフレーズをそのスローガンとして掲げてみせた。

今すぐ手に入る未来。もちろんこれは情報家電産業の育成を目指して掲げられた文字通りのスローガンであり、それ以上の意味があるわけではない。だが、それでもあらためて確認しておくべきだと思うのは、技術的な実現可能性と社会的な実現可能性のギャップについてである。技術的に「今すぐ手に入る」事柄が、社会的にもそのまま実現するとは限らないのである。周知のようにこうした議論は、技術発展の偶有性を強調する社会構築主義的なテクノロジー研究によって繰り返されてきた。その意味で、こうした指摘は何ら目新しいものではない。しかしながら、「家庭」という空間について考える時、こうした論点は再び特別な重要性をもつように思われる。

では家庭空間とは何か。ここでは一点だけ確認しておきたい。すなわち、家庭空間は単なる物理的空間には還元できないという点である。家庭空間はまず何よりも社会的・文化的な制度であり、そこには様々な慣習や規範、ジェンダーや世代をめぐる権力関係が埋め込まれている。つまり、家庭空間とはその内部で様々な力学が重層する場なのである。だとすれば、家庭の情報化とは、物理的空間としての住居に新たなテクノロジーが組み込まれていくだけのことではない。それは同時に、そうした家庭空間の力学の中で、テクノロジーをめぐる様々なせめぎあいが増えられていくプロセスでもある。家庭の情報化の実態を捉えようとするならば、上で述べた技術的/社会的な実現可能性のギャップという論点は、まさにこの点においてあらためて捉え返されていかねばならないはずである。

本稿では、こうした問題関心に応えていくための予備的な作業として、家庭を一つの「情報エコロジー」として捉える試みをしてみる。後で見るように、Nardiらがその著書「Information Ecologies - Using Technologies with Heart」[1]で提唱した情報エコロジーの概念は、テクノロジーだけではなく、その利用者をも含みこんだ形で、情報テクノロジーのある環境それ自体を包括的に捉える概念である。したがって、私たちはこの概念を家庭空間に適用することで、家庭空間を単なる「箱」としてではなく、そこで情報テクノロジーと人々が様々な相互作用を織り成していく動的な空間として捉えることができる。そして、そうした視座の獲得は、今後ますます進展していくであろう家庭の情報化の動態を見通していくときに一つの方向性を与えてくれるはずである。そのために、以下ではまず、これまでのメディア史やカルチュラル・スタディーズのメディア受容研究の成果の中から、特に家庭空間を主題化してきた幾つかの先駆的な論考の知見を

DOBASHI Shingo
武蔵工業大学環境情報学部講師

概観し、家庭空間の力学なるものが具体的にどのようなものなのかを確認していく。その上で、Nardiらが定式化した情報エコロジー概念を家庭空間に接合していく道筋を探っていく。

2 家庭空間の力学

2.1 「文脈」としての家庭空間

メディア受容研究、メディア史の分野について言えば、家庭空間はそこで最初から主題化されてきたわけではなかった。むしろ、ある程度の研究史的な蓄積の後であらためて主題化されることが多かったのである。たとえば、「テレビ」という情報テクノロジーを家庭空間との関わりにおいて捉えた代表的論者であるMorleyとSpiegelは、オーディエンス・エスノグラフィ、放送メディアの社会史というそれぞれに異なる作業、先行研究への次のような問題提起から始めている。

私の中心的な主張は、変化するテレビ視聴のパターンは家族の娯楽活動全体の文脈の中でのみ理解されるということである。この分野での既存の議論は、本来は一緒に考察されるべき相互に結びついた問題、すなわち視聴者が読み取る意味、そして、その視聴が行われる場の社会関係（主に家族関係）という問題について、その一方、あるいは他方にのみ焦点を当てる傾向があった。(Morley[2], p.13)

この新しいメディアの登場を考える際、これまでの多くの放送史研究者は、家族生活の歴史的な文脈性を無視して、政治経済的要因に基づいて説明することを好んできた。しかしこのような歴史考察では、テレビをその最も重要な受容空間つまり家庭から切り離してしまうため、テレビの文化様式を形成する幾つもの社会的要因を説明できなくなるのである。(Spiegel[3], p.11)

一読して理解されるように、両者が共有しているのは、テレビという情報テクノロジーを取り囲む「文脈」としての家庭空間への目配りである。Morleyの場合であれば、それはテレビが人々の日常生活の中で実際にどう視聴され、どう利用されているのかを知る上で不可欠な要素だったのであり、Spiegelの場合には、テレビという情報テクノロジーが1930年代以降のアメリカにおいて社会的にいかなる存在として位置付けられていったかを辿る上でやはり不可欠な要素だったのである。

こうした問題提起が果たした貢献には大きいものがある。それによって、テレビという情報テクノロジー

をそれが実際に置かれる場、さらにはそこでの人々の振る舞いをも含めた形で捉える視座が開示されたからである。両者が指摘するように、番組テキストの解釈学やテレビの政治経済学といった議論は、テレビという存在を他の要因、中でも特にその利用者の日常生活から切り離してしまう傾向があった。それに対して、MorleyやSpiegelは、そもそもテレビという新しい情報テクノロジーがいかにして人々の生活に入り込むことができたのか(Spiegel)、そして日常生活に入り込んだテレビは人々の生活や家族関係をどのように編成・再編成していくのか(Morley)といったより根本的な問題を、テレビと家庭空間の相互作用の内に捉えようとしたのである。

では、そこで見出された家庭空間の力学とはどのようなものだったのだろうか。両者の論点は多岐に渡るが、まずMorleyが最も強調するのは、家庭空間におけるジェンダー的な権力作用である。実感に照らしても明らかのように、テレビは家族の中で均等に観られているわけではない。リビングルームに展開する家族視聴の中で、誰が観る番組を決定するのか、また誰が「専念視聴」し、誰が「ながら視聴」をするのか。彼の調査によれば、そこには明らかなジェンダー差があるという。つまり、リモコンを握り番組を選択するのはしばしば男性であり、既婚女性の多くはその選択に、家事の合間の「ながら視聴」で付き合うことになる(注2)。こうした知見から、彼はテレビを観るという実践が、家庭内でのジェンダー的な権力関係に深く関わり、それを再強化していくことを確認する。テレビが置かれる家庭空間は社会的な真空状態にあるのではない。それは、そもそも様々な葛藤や交渉の場だったのであり、テレビもまたそうした力学の中へ編み込まれていくのである。

これに対してSpiegelは、テレビと家庭空間の相互交渉の過程を歴史的に明らかにしようと試みている。「Make Room for TV」という著作タイトルが示すように、彼女が問うのは、そもそもは存在しなかった新しいテクノロジーであるテレビが、いかなるプロセスを経てアメリカの家庭生活に入り込んでいったのかという問いである。彼女が指摘するように、観念としての「家庭的なるもの」は公/私の違い、またその区別のジェンダー的な配分などによって成立するイデオロギーである。そして、現実の家庭空間も男の場所、女の場所、その他様々な意味付けを伴う空間の布置構造を持っている。そこにテレビがはじめて編入されていくとき、テレビはそうした家庭空間にふさわしい存在として再構成されねばならなかったし、また家庭という観念もテレビという新たな家庭娯楽の影響から自由ではなかった。つまり、テレビも家庭も初めから今私たちが知

っているような形で存在していたのではなく、「テレビのある暮らし」という今日自明視されている生活様式自体が、テレビと家庭空間の相互交渉の歴史を通じて構築されてきたものなのである。

もちろん、「テレビ」についてこのような議論を展開した両者は、今日の情報化までを見通していたわけではない。だが、情報テクノロジーと家庭空間の相互交渉という視座は今日の状況を捉える上でも有効であろう。今日の家庭の情報化をめぐる言説の多くは、テクノロジーを主体に、家庭空間をテクノロジーの影響の宛て先、対象、客体として捉えている。だが、Morley や Spigel が明らかにしたように、家庭空間は単なる客体ではなく、テクノロジーの具体的なあり方を規定する「文脈」として機能するのである。もちろん、テクノロジーの影響はその「文脈」自体を変容させてもいくが、それもあくまで相互規定的な関係として理解されるべきプロセスであろう。家庭空間の力学は、ミクロな次元で情報化の方向性を規定する重要な要因なのである。

2. 2 テクノロジーの 'domestication'

Morley や Spigel の影響も受けつつ、こうした論点をより洗練された形で展開したのが、Silverstone を中心とした共同研究に端を発する「家庭空間におけるテクノロジーの消費」をめぐる議論である[4]。このプロジェクトは、総じて言えば、カルチュラル・スタディーズ的な発想とテクノロジー研究が会っていく場であったといえるが、参加者はそれぞれに社会学、人類学、歴史学など異なる出自をもっている。そして、そうした多様な参加者のあいだでゆるやかに共有されているのが、その後の研究潮流にも影響を与えていくことになる、テクノロジーの 'domestication' という視座である。

では、彼ら彼女らのいう 'domestication' とはいったい何であろうか。やや日本語にしにくい概念ではあるが、あえて訳すならば「家庭内化」ということになる。また、'domestication' には「飼いならし」という意味もある。つまり、そこで含意されているのは、新たなテクノロジーが家庭に入ってくるときに、そのむきだしの技術を家庭空間に適合するように馴致していく人々の実践である。こうした発想で彼ら彼女らが何を捉えようとしているのかについては、Silverstone らがその論集の冒頭で引用している Williams の次のような言葉を見ればよく理解できるだろう。

私たちの社会の大きな特徴は、きわめて新しいテクノロジーときわめて古い社会形式の自発的な共存である。(Williams [5], p.192) (注3)

きわめて長い歴史のなかで造形されてきた「古い社会形式」としての家庭。急速な技術革新によって次々と登場する「新しいテクノロジー」。Silverstone らが 'domestication' という視座から捉えようとしているのは、この「古いもの」と「新しいもの」の接合過程、あるいは、「新しいテクノロジー」が「古い社会形式」である家庭の物理的・象徴的な敷居を超えていく際の両者のせめぎあいである。Silverstone らの論集では、テレビだけではなく、パソコンや電話あるいは電子レンジといったテクノロジーまでが議論の対象とされている。そうした「新しいもの」に出会った人々が、家庭空間のなかでその新しさをどのように意味付けていくのかを記述し、それを通じて、テクノロジーの「影響」なるものを、技術決定論を回避しながら実定的な次元で理解していくこと。これが、'domestication' という視座を導入する彼ら彼女らの基本的な問題関心である。

こうした関心を共有しながら、その上で、家庭空間を具体的にいかなる場として捉えるかについては論者によって違いがある。Silverstone 自身は、家庭空間をひとつのモラル・エコノミーの体系として理解している。彼が重視するのは、家庭という空間が、一方で公的領域＝市場に展開する商品経済と密接な関わりを持ちつつも、他方でそれとは異なるロジックを作動させていく空間であるという点である。つまり、私的領域としての家庭には、公的領域のそれとは異なる独自の規範、認識、評価、美学の体系があり、それらはそれぞれの世帯の歴史によって定義されている。そして、そうしたモラル・エコノミーの体系はいわば意味の経済なのであり、ひとつのモノあるいは商品としてのテクノロジーは、家庭空間の敷居を超えるときに、そうした意味の経済へ編み込まれ、また編み込まれることによって家庭空間の中で一定の位置を獲得していくのである(注4)。

具体的なイメージを掴むために、こうした視座から見出された個々の知見について幾つか見ておきたい。様々な対象についての様々な知見が蓄積されているが、多くの論者に共有されているのは、やはりジェンダーの問題である。

たとえば、Livingstone[7]は、テレビや電話からビデオや AV 機器に至るまでの家庭用情報機器についてのインタビュー調査を分析する中で、一連のテクノロジーに対する意味付けが夫婦間で大きく異なっていることに注目する。たとえば、テクノロジーをその機能や性能という観点で語る男性と、テクノロジーを日常生活の具体的な文脈の中で評価しようとする女性。あるいは、様々なテクノロジーの中でも特にテレビやラジオを重視し、テクノロジーに社会的接触の「代理」

を見出す男性と、むしろ電話や車を重視し、テクノロジーに社会的接触の「促進」を見出す女性。そこには、明らかに夫婦間でのテクノロジーに対する意味付けの差がある。きわめて些細な観察に見えるかもしれないが、テクノロジーの家庭空間への浸透は、その過程でこうした家族内でのジェンダー的な差異を顕在化するのであり、テクノロジーはそうした差異をめぐる家族間の交渉過程のなかで‘domesticate’されていくのである（注5）。

さらに、‘domestication’ と相同的なプロセスは、個々の家庭のみならず、特定の文化を体現する共同体という水準で論じられてもいる。たとえば、Umble によるアーミッシュの家庭における電話の受容についての研究である[8]。周知のように、アーミッシュの人々の生活は独自の宗教的価値観に貫かれており、そこでは自らの共同体とその外部との関係が厳密に統制されている。そのため、「外部からの侵入」を媒介する電話は彼ら彼女らにとって自らの道徳的秩序に対する脅威とみなされた。最終的には、アーミッシュの人々は電話を一定の制限の下で受け容れることになる。だが、Umble が明らかにしたように、アーミッシュの共同体においては、電話は個々の家庭の私的空間にではなく、数家族で共有される公的なブースに設置され、さらに、そこでは外部からの呼び出しを受けることが禁じられていったのである。つまり、アーミッシュの人々は、自らの宗教的価値観の中で電話を再構成していったのであり、そうすることで、独自のモラル・エコノミーの空間である家庭と電話との関係を慎重に制御していったというわけである。

こうした一連の研究は、一言でいえば、家庭空間における「テクノロジーの解釈」というものを問題にし、それが一定の可塑性を持つものであることを示したといえる。つまり、テクノロジーは社会の公的領域で開発され商品化されるが、それはそのまま家庭に編入されるのではない。テクノロジーはひとたび私的空間に入ると、その私的空間に適合するような解釈を与えられていくのである。そして、その解釈の具体的様相を見ていくときに重要な要因となるのが、家庭空間の力学であり、ここで見たジェンダーや宗教といった要素に留まらず、階級やエスニシティ、世代や文化的志向による価値観、個々の家庭に独特の規範や慣習といったものまでが、「テクノロジーの解釈」に作用する。その意味で、‘domestication’ という枠組みも、家庭空間が単なる「客体」でないことを示すものであり、家庭におけるテクノロジーの受容過程が、社会におけるテクノロジーの具体的なあり方を最終的な段階で規定していく重要な局面であることを示したものだといえる（注6）。

3 情報エコロジーとしての家庭空間

3.1 情報エコロジー概念の有効性

さて、以上見てきたように、家庭空間を主題化してきた一連の研究は、まず家庭空間をテクノロジー受容の「文脈」として捉え、さらにその「文脈」の作用を‘domestication’ という視座から記述してきた。本稿の冒頭でも示唆したように、この「文脈」への目配り、すなわちテクノロジーをそれのみで論じるのではなく、それを取り囲む環境を含めて論じようとする姿勢は、お互いの参照関係がほとんど見当たらないにもかかわらず、Nardi らによる情報エコロジーをめぐる議論と通底する部分がある。では、その情報エコロジー概念とは具体的にどのようなものであり、それを家庭空間に接合することにはどのような意義があるのだろうか。まずは、Nardi らの情報エコロジー概念の定義を見ておこう。

我々は情報エコロジーを特定のローカルな環境における人々、実践、価値のシステムとして定義する。情報エコロジーにおいて焦点となるのは、テクノロジーではなく、テクノロジーに提供された人間の活動である。(Nardi and O'day[1], p.50)

このように定義される情報エコロジー概念が家庭空間をめぐる一連の研究と共有しているのは、テクノロジーの利用者とその実践を重視しようとする構えである。また、テクノロジーをめぐる議論を巨視的ではなく、あくまでローカルな場面の観察から展開しようとする発想にも通じるものがある。しかしながら、ここで重要なのは両者の相同性を指摘することではない。むしろ求められるのは、両者を批判的に接合することで、その認識の射程をどのように押し広げることができるのかを検証することだろう。ではまず、こうした観点から見たとき、情報エコロジーという概念は、前節で見てきたような一連の研究に対してどのような新しい視点を付け加えることができるだろうか。

まず重要なのは、Nardi らが繰り返し強調しているように、情報エコロジーは常に進化し続けるシステムとして概念化されているという点である。Nardi らはこの点について、エコロジーとコミュニティ（共同体）の違いを例に取りながら説明している。つまり、相対的に均質で変化しにくいものとして概念化されているコミュニティに対して、エコロジーという概念はより変化に開かれたシステムを含意する。情報環境のあり方を表現するメタファーとしてエコロジーという言葉を導入する Nardi らは、情報環境を「変化」に開かれた動的なものとして捉えているのである（注7）。これ

に対して、家庭はその定義からして典型的なコミュニティ（共同体）である。ゆえに、Silverstone らがおそらくは明確に意識していたように、家庭空間はその内部の秩序を維持しようとするメカニズム、すなわちある種の「変わりにくさ」を内包している。しかしながら、以下で述べるように、近年の情報化の急速な展開を念頭に置かなければ、家庭空間をあえてより変化に開かれた動的な場として想定しておくことには一定の意義がある。そして、この点こそが情報エコロジー概念を家庭空間に接合する最大の利点であるといえる。

ここで前節で見た Spiegel の議論を思い起こそう。彼女が記述したのは、テレビと家庭空間の相互交渉の歴史であり、そこには確かにテレビを 'domesticate' していく家庭空間の力学が作動していた。だが、彼女が一方で注意を促していたのは、その過程で、家庭空間もまた大きな変化を経験したという単純な事実である。「テレビのある生活」はそれ以前の家庭生活と一定の連続性を持ちつつも、やはりテレビ以前とは大きく隔たっていたのである。慎重な検討と観察を要するであろうが、近年のデジタル情報化も同程度の変化を家庭空間にもたらす可能性がある。もちろんそれは、多くの言説が想定しているような技術決定論的な変化ではあり得ない。だが、新たなデジタル情報技術は、家庭空間の力学の中で 'domesticate' されながらも、そのプロセスを通じて、やはりこれまでの家庭生活とは大きく異なる生活様式を準備するかもしれないのである。

こうした今後起こりうる変化をテクノロジーの問題に還元することなく、テクノロジーとそれを取り囲む諸要素のまさにエコロジカルな変容として捉えることができる情報エコロジー概念は、「新しいもの」と「古いもの」とがせめぎあう家庭空間の情報化プロセスを記述する上できわめて有効な概念である。そうした作業を歴史記述として行うのではなく、現在進行形で進行しようとする場合には特にそうである。歴史ではなく、今そこに進展している同時代の情報化をめぐる議論においては、単にその現状を正確に言い当てるだけではなく、きわめて愚直な言い方をすれば、現状を理解した上で「より良い情報化」のあり方を構想していくことまでが求められる。この課題を前にしたとき、ローカルな場の力学を捨象することなく、一方でそのローカルな場の変化をより積極的に捉えうる情報エコロジーの概念は、家庭空間の基本的に保守的な性格を強調する 'domestication' の枠組みに比べて、変化への介入と将来構想を实践する上で有利な位置にいるのである。

実際に、Nardi ら自身もこうした課題を強く意識している。それは著作の第六章、すなわち、"How to Evolve Information Ecologies" というタイトルの下で、情報エコロジーに関する「実践的方法」が提示された部

分を見れば明らかであろう。そこで「実践的方法」として提示される事柄は、次の三点に要約されている。すなわち、第一には、利用者の理想や倫理と関わる「中核的価値」をもって情報エコロジーに臨むこと、第二には、情報エコロジーにおいて用いられるテクノロジーにどのような意味が付与されるかに注意を払うこと、そして第三に、常にそのテクノロジーの使用を問い続け、どのようにではなく、なぜそのテクノロジーを使うのか、なぜそのテクノロジーが良いのかなど、"know-why" という戦略的な問いかけをすること、である（注 8）。

こうした議論はテクノロジーの利用者ひとりひとりを情報環境の「主体」として捉え、そうすることでテクノロジーを不可避的なものとして無批判に受け容れてしまう（あるいは完全に拒否してしまう）発想を棄却する効果を持つ。というよりも、Nardi らの意図する情報エコロジーが成立するためには、自らの環境を積極的に構築していく人々の実践が不可欠なのであり、それなしでは健康な情報エコロジーはあり得ないと考えられている。もちろん、現状を見ればこうした実践が常になされているとは言いがたく、だからこそ、Nardi らの議論は「今後」を構想していく上で大きな意義をもつことになる。その意味では、情報エコロジー概念はある種の当為概念でもあり、その価値的な妥当性を認めるならば、その射程を家庭空間にまで広げていくことの意義は大きいといえる。

3.2 情報エコロジー概念への留保

このように情報エコロジー概念を家庭空間に適用することには一定の意義が確かに認められる。だが、それは具体的にどのようにして可能なのであろうか。Nardi らの情報エコロジー概念は、たとえば具体的な調査研究に即座に応用できる便利な枠組みというわけではないし、また必ずしも厳密な論理的一貫性を備えた理論体系でもない。それはむしろ、実践レベルでの提案を含んだ「視座」ないしは「発想」であり、それを応用しようとするときには、その具体的方法が吟味されねばならないだろう。とはいえ、この問いに今ここで応えていく準備は筆者にはない。そこで、以下ではこれまで本稿で概観してきた範囲で、情報エコロジー概念を家庭空間に接合していく際に留保を付け加えねばならないと思われる点をあげ、今後の議論の準備としたい。

まず、最も基本的な次元でさらに考えていく必要があるのは、エコロジーというメタファーを家庭もその一つであるような「社会的空間」に適用することの難しさについてである。もちろん、既に確認したように、エコロジーというメタファーには様々なメリットがあ

る。しかしそれは、あらゆるメタファーがそうであるように、事の一面への認識を深めると同時に他の面を見えにくくしてしまう。そして、家庭の情報環境にエコロジーというメタファーを適用するときにおそらく問題となるのは、それが家庭空間で作動する権力関係の政治性を見えにくくしてしまう、あるいは軽視してしまうことに繋がるという点である。いうまでもなく、この権力関係や政治性の問題は第2章でみた家庭空間の力学に照準する一連の研究が常に重視してきた点であり、二つの議論を架橋していくときには、まずこの問題をどう考えるかが重要な論点になるだろう。

具体的に見ていこう。たとえば、Nardi らは、健康な情報エコロジーを構築するためには、そこに含まれる全ての人々がテクノロジーのあり方をめぐる議論に参加することが重要であるという。そして、Nardi らは正当にも、そうした議論がときに、その環境における、ある種のタブーや現行の権力構造の緊張関係を表面化してしまうことを指摘する(注9)。ここで注意すべきは、こうした指摘をしながらも、Nardi らはそれでも情報エコロジーの構築に取り組む人々はそうした事象を「問題」として認識でき、そうした事象についての開かれた議論が可能であると想定している点である。もちろん、そういう場合もあるし、そうした姿勢をひとつの理想として保持しておくことは重要である。しかしながら、家庭空間の力学の複雑さを考えるならば、こうした想定が裏切られていく場面を同時に想定しておく必要があるように思われる。

ここで、家庭空間の力学に照準した一連の議論が常に重視してきたジェンダーの問題をもう一度思い起こそう。一連の研究が、たとえばテレビ番組の選択権や情報テクノロジーの意味付けにおける夫婦間のギャップといった、一見すると些細な事象に執拗にこだわっていたのはなぜだろうか。それは、単に家庭におけるジェンダー的な不均衡をあらためて告発するためではない。そこでむしろ重視されていたのは、テクノロジーをめぐるジェンダー的な作法が、それを実践する人々のジェンダー的なアイデンティティを再強化し、家庭空間の秩序体系を再強化していくことがあるという点である。つまり、テクノロジーをめぐるジェンダー的な不均衡は、ときに「問題」として意識され、「議論」される前に、それまでもそうであったような「家庭の日常」として生きられてしまうのであり、家庭空間におけるミクロな権力作用はその自明性の中であらためて問われることなく、暗黙の内に発揮されてしまうのである。

ここに家庭空間における権力関係の政治性の根深さがある。そして、人々がローカルな環境における葛藤や摩擦を常に明示的な「問題」として意識し、その「改

善」に取り組んでいくことができると想定することは、その根深さを看過してしまうことにも繋がる。もちろん、主にオフィスや図書館や病院といったフィールドでの経験をもとに構築された情報エコロジー概念にこの点の不足を求めるのは無理があるかもしれない。だが、そうした場も含めて、現実の情報環境は情報エコロジーであると同時に様々な政治性を内包する社会的空間でもある。別の言い方をすれば、特定の情報環境を生きる人々は、エコロジカルな身体であると同時にソシオロジカルな身体でもあるのだ。そしてそれは、Nardi らが暗黙の内に、あるいは意識的・戦略的にそう想定したような主意主義的な主体ではない。それは自らの意図と選択に基づいて行為しながらも、常に社会構造からの一定の拘束を受けていくのである。家庭空間におけるジェンダーをめぐる議論は、家父長制やセクシュアリティの社会権力との関わりで、まさにこの点を論じていたのであった。

もちろん、こうした批判は情報エコロジー概念への内面的な批判ではなく、その議論を外側からみたときに初めて可能になっているにすぎない。その意味で、それは Nardi らの情報エコロジーという視座の価値を減じるものではない。しかし、情報エコロジー概念の基本的な発想を活かしながら、それを現実の社会的空間へ接合していく仕方を探ろうとするならば、それは特定のフィールドとの関係で常に再構築されていく必要がある。Nardi らが、「より良い情報エコロジー」を構築していくための具体的な実践を射程に入れていることを考えれば、こうした試みも許容されるであろう。そして、家庭空間という場はそうした思考を進めていく上で、きわめて重要な参照点となるはずである。

4 結論にかえて

さて、以上本稿では、まず家庭空間に照準したメディア史、メディア受容研究を概観し、その上で、情報エコロジーの概念を家庭空間に接合することの可能性を探ってきた。上で見てきたように、そこには一定の意義が認められるものの、そのためにはまだ多くの課題が残されている。だが、いずれにせよ、急速に進展しつつある家庭の情報化を見通していく際に、テクノロジーだけではなく、その利用者、利用の文脈までを含めて考えていくことが必要であることには疑いの余地がない。本稿で見てきた、家庭空間の力学をめぐる一連の研究と Nardi らによる情報エコロジーをめぐる議論は、その際にまず参照すべき議論として重要な位置を占めている。

翻って考えてみれば、私たちの情報環境を「より良い」ものにしていくためには、まず利用者自身がテク

ノロジーに対して構築的な役割を果たしうる存在であることを理論的に根拠づける必要があり、情報エコロジーをめぐる議論はそのためにも多大な貢献をすることができるように思われる。そして、そうした作業をより精緻なものにしていくためには、家庭空間の力学をめぐる一連の研究が行ってきたように、テクノロジーをめぐる私たちの日常的実践が現実としてきわめて政治的なものであることを見定めていく必要がある。だとすれば、両者は今後の情報化の動向を考えていく上でおそらく協働できるし、そうすることで互いの議論の射程を広げていけるはずである。

本論でも述べたように、この二つの議論は、両者ともさほど長い歴史をもたないということもあり、ほとんど参照関係を持つことなく別々の場で進められている。また、この両者に限らず、たとえば、近年その展開が著しいメディア・リテラシーをめぐる研究や(注10)、家庭空間だけではなく都市空間や国民国家の空間にまで議論の射程を広げてきたカルチュラル・スタディーズの空間論的なメディア論など(注11)、さらに協働関係を結びうる研究潮流が幾つも登場している。現状では、こうした複数の研究潮流を互いに接合していく試みはほとんど未着手の状態であるが、現実レベルでの情報化の進展の速さに対応するためには、そうした試みが今後さらに求められるのではないだろうか。

(注1)このイベントの概要については、次のウェブサイトで紹介されている。「JEITA HOUSE-情報家電モデルハウス」

(<http://www.eclipse-jp.com/jeita/index2.html>)

(注2)文献[2],p.146-72

(注3)文献[4],p.1での引用

(注4)文献[6],pp.16-20

(注5)だが、こうした議論において、Livingstoneは、男性と女性の本質論的な差異を含意しているわけではない。Livingstoneは、こうしたテクノロジーへの認識の差は単なる男女差ではなく、各家庭での夫婦の雇用形態や性別役割分業の度合いなどに規定された「夫婦間の距離」に媒介されていることを強調している。

(注6)この他にも多くの知見を蓄積したこの共同研究は、主に80年代から90年代初頭の議論と調査を基盤にしている。その後、この'domestication'という視角は、多くの研究者に受け容れられ、発展させられてきた。代表的なものにノルウェーの研究者たちを中心にした実証的な作業があり、その成果は"Making Technology Our Own?: Domesticating Technology into Everyday Life"[9]と題された論集にまとめられている。また、1999年にはNew Media & Society誌が発刊

され、'domestication'に照準した議論が数多く発表されている。こうした研究潮流が示しているように、家庭空間の力学のミクロ分析に分け入っていくテクノロジー研究は、情報化の具体的様相を読み解く一つの方法として定着しつつある。

(注7)文献[1],p.56

(注8)文献[1],pp.65-71

(注9)文献[1],p.71

(注10)メディア・リテラシー研究の最近の動向については、文献[10]を参照。

(注11)たとえば、郊外という空間とテレビの相関的な関係について論じたSilverstone[11]や、国民国家あるいはグローバルな空間とメディア・テクノロジーの関連を論じたMorley & Robins[12]、さらには、"home"という観念を家庭だけでなく、国家やメディア空間の変容と関連付けて論じたMorley[13]などの議論はその代表である。

参考文献

- [1]Nardi,B.A. and O'Day,V: Information Ecologies - Using Technologies with Heart, The MIT Press.,1999
- [2]Morley,D.: Family Television - Cultural Power and Domestic Leisure, Comedia/Routledge,1986
- [3]Spigel,L.: Make Room for TV, The University of Chicago Press,1992
- [4]Silverstone,R. and Hirsch,E.(eds.): Consuming Technologies - Media and Information in Domestic Space, Routledge,1992
- [5]Williams,R.: "Advertising: The magic system" in Williams,R.(ed.),Problems in Materialism and Culture, Verso, pp.170-195.,1980
- [6]Silverstone et al.: "Information and Communication Technologies and the Moral Economy of the Household" in Silverstone and Hirsch,(eds.), pp.15-31,1992
- [7]Livingstone,S.: "The meaning of domestic technologies - a personal construct analysis of familial gender relations" in Silverstone and Hirsch,(eds.), pp.113-13,1992
- [8]Umble,D.Z.: "The Amish and the telephone - resistance and reconstruction" in Silverstone and Hirsch,(eds), pp.183-194,1992
- [9]Lie,M. and Sorensen,K.H.: Making Technology Our Own?: Domesticating Technology into Everyday Life, Scandinavian University Press,1996
- [10]水越伸: デジタルメディア社会, 1999, 岩波書店
- [11]Silverstone,R.: "The suburbanization of the

public sphere" in Silverstone,R., Television and Everyday Life, Routledge, 1994
[12]Morley,D. and Robins,K.: Spaces of Identity - global media, electronic landscape and cultural

boundaries, Routledge, 1995
[13]Morley,D.: Home Territories - Media, Mobility and Identity, Routledge, 2000